

☆待降節第2主日(12月6日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読(イザヤの預言 40章1-5、9-11節)

慰めよ、わたしの民を慰めよと
あなたたちの神は言われる。
エルサレムの心に語りかけ彼女に呼びかけよ
苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。
罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。
呼びかける声がある。
主のために、荒れ野に道を備え
わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。
谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。
険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。
主の栄光がこうして現れるのを肉なる者は共に見る。
主の口がこう宣言される。
高い山に登れ
良い知らせをシオンに伝える者よ。
力を振るって声をあげよ
良い知らせをエルサレムに伝える者よ。
声をあげよ、恐れるな、ユダの町々に告げよ。
見よ、あなたたちの神
見よ、主なる神。
彼は力を帯びて来られ、御腕をもって統治される。
見よ、主のかち得られたものは御もとに従い
主の働きの実りは御前を進む。
主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め
小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。

第二朗読(使徒ペトロの手紙Ⅱ 3章 8～14節)

愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい。

福音朗読 (マルコによる福音書 1章 1～8節)

神の子イエス・キリストの福音の初め。預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。荒れ野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

そのとおり、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

皆様、お元気でいらっしゃると思います。待降節も二週目に入り、祭壇わきの四本のローソクも二本に灯がともりました。今日の主日のテーマは「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という洗礼者ヨハネの言葉を載せたマルコ福音の言葉です。私たちの天の国への旅路はいかにも曲がりくねり、穴ぼこだらけなのではないでしょうか。その道を通って私たちは果たして天の御国、主であるイエス・キリストにたどり着けるのでしょうか。

また今日は「宣教地召命促進の日」でもあります。日本は宣教地であることは間違いありませんが、日本に宣教師が来られるだけでなく、日本からも司祭、シスターだけでなく男性信徒も女性信徒も宣教師となって外国に出かけているのです。そして少ない人数ながら神の御国建設のために働いておられるのです。この方々を思い起こして祈りと捧げものをいたしましょう。そして、私たちも近所の方々への宣教師となって働きましょう。

第一朗読（イザヤの預言 40章1-5、9-11 節）

「慰めよ、私の民を慰めよ」。このイザヤの預言の言葉は有名な歌となっています。主である神はまた父なる神でもあります。ご自分の民がいかに罪深くてその嘆きを無視なさる方ではありません。主の栄光が現れる道を準備するよとの声が響き渡っています。この声は福音朗読でまさに近づかれる救い主を迎えるように洗礼者ヨハネの言葉となってユダヤの荒れ野に響き渡っています。高い山に登り、「力をふるって声をあげよ。」「見よ、あなたたちの神、主なる神が、力を帯びて救いのために来られる」と。これほどの喜びのメッセージがあるのでしょうか。待降節、降誕節になると私たちの心は安らかな気持ちになります。そうです。救いの希望があるからです。救いの希望が与えられたからです。希望なしの回心はありません。希望を持って再び主を待ち望みましょう。

第二朗読(使徒ペトロの手紙II 3章 8~14節)

この手紙がしたためられた初代教会には「主の再臨はいつなのか？」という問題があったようです。そのためにこの手紙ではその問題に答えようと出されたようです。「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、(主は)あなた方のために忍耐しておられる」のだと。再臨が遅いのを神の責任とするような考えは根本的に間違っているのです。私たちは自分の期待に応えないのを他人の責任にしがちです。本当は自分のほうに原因があることが多いのです。日頃の自分の行いを点検して生きることが大切ですと、このペトロの手紙は訴えています。

福音朗読 (マルコによる福音書 1章 1~8節)

マルコ福音はド直球でその福音を始めます。「神の子イエス・キリストの福音の初め。」と。書き方としてはヨハネ福音と似ています。この福音が四福音の第一番目に出されたのは、いろいろなエピソードなしに福音(良い知らせ)を告げ知らせること、そしてその福音を告げ知らせておられるのはイエスであることに特化しているからだといえるのではないのでしょうか。またそれを一番よく体現している人物を登場させていることでも明らかです。その人物は洗礼者ヨハネです。先触れの人物です。洗礼者ヨハネは「ラクダの毛衣を着、腰に革の帯を締め、イナゴと野蜜を食べていた」。まさに破天荒の人物、野人で、救い主イエス・キリストを知らせる、そのためにだけ命を懸けている人物を登場させているのです。当時のユダヤの人々はさぞびっくりしてこのヨハネを見たことでしょう。そのはっきりしたメッセージ、誰をもはばからない人、このヨハネに少なからざる人々が心惹かれ、ついていったのです。そしてこのヨハネが指し示した方向にイエスが人々の中におられ、福音を告げているとマルコは言っているのです。私たちの中におられるイエス。既にひっそり生まれたイエス。それを探しに行きましょう。そのためには混じりけのない純粋な心が必要です。ゆるしの秘跡を受けて心を清めて主を探しに出かけましょう。

来週の13日の9:00から阿部神父様が来られて、ゆるしの秘跡を授けて
くださいます。この機会を大事に使いましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光